

# ネットことばに対する日本語学習者のニーズと 教材化に関する考察

## An Analysis of Japanese Language Learners' needs for Net Slang in Teaching Materials

チャモロ・セバスチャン・ウリエル

### 要旨

Entre los estudiantes de idioma japonés, se encuentran aquellos que utilizan la internet como medio para comunicarse con nativos del idioma. Sin embargo, en muchos casos la jerga utilizada en internet no es de conocimiento popular, lo que dificulta la comunicación entre nativos y estudiantes. En este artículo se ha hecho un análisis sobre las necesidades de dichos estudiantes, y en base a ese análisis se hace la propuesta de incorporar la jerga de la internet en materiales didácticos.

【キーワード】日本語教育、バリエーション、ネットことば、ニーズ分析、教材化

### 1. 研究背景

日本語学習者の中には、ネット上のコミュニティに参加し、そこで同じ趣味を持った仲間を求め、人間関係を築く者がいる。また、日本語の練習の場としてそのようなネット上のコミュニティに参加する学習者もいる。ネット上のコミュニティではインターネット特有の表現、いわゆる「ネットスラング」というものが使用されることが多い。このようなネット上の特殊な表現は、学習者が知っている日本語とは異なるものであり、人間関係を築く上で大きな壁となる場合がある。

そのため、学習者は学習者同士で情報を収集し、共有し、理解しようと努力する。しかし、多くの場合、入手できる情報に制限があったり、間違っていたり、さらに使用時の注意事項が記載されていないことが、学習者がその表現を不適切な場で使用し、それが何らかの問題になることにつながる可能性がある。

一方、日本語教育は誰にも通じて失礼にならないような日本語を中心に行われ、学習者の要望に合わせて方言や若者ことばなどの口語表現が取り上げられることもあるが、ネッ

ト上の言葉が取り上げられることはない。さらに、偏見を持った教育者がおり、このようなネット上の言葉を日本語として認めようとしないうという否定的な立場もみられる。

しかし、実際のコミュニケーションは「きれいな言葉」だけで成り立っているのではない。米川(1998:3)は「親しい者同士が集まっている時はホンネで話すことが多く、『良いことば』よりも『悪いことば』を口にする方が多い」と述べ、「悪いことば」の研究の重要性を主張している。また、小矢野(2007:38-39)によれば、そのような言葉は日本語母語話者だけでなく、日常会話に参加している日本語学習者にとっても必要である。そのため、今後の日本語教育でも参考にできるネット上の言葉の研究が必要であると考えられる。

本稿では、ネット上の特殊な言葉を「ネットことば」と呼び、学習者のネットことばに対する興味や遭遇経験など、学習者のニーズを調査し、ネットことばを日本語の教材に取り入れる必要性や教育におけるネットことばの扱い方について考察を行う。

## 2. 「ネットことば」とは何か

本節では、具体的にネットことばとは何かについて説明する。ネット上の特殊な表現を一般的には「ネット用語」や「ネットスラング」と呼ぶ傾向がみられる。まずはそれらの用語について考えたい。

「ネット用語」という言葉は、研究者の間でも「ネット上の特殊な言葉」という意味で幅広く使用されているが、「用語」という言葉には、「インターネットに関する専門用語」という意味があるのではないかと考える。具体的には次のようなものが考えられる。

(1) Email, blog, SNS, html (パソコン用語、インターネット用語)

(2) つぶやき, 足跡, シェアする (SNS 用語)

(1)と(2)は筆者の考えるネット用語の例である。(1)のように、幅広く使用される用語もあれば、(2)のように特定のウェブサイトで使用されるものもある。しかしこれらは特殊な言葉でありながら、専門用語であり、本稿で問題にしているものではない。

次に「ネットスラング」について考えたい。この用語はネット上のスラング、つまり俗語のことをいうため、ネット用語とは異なったものであると考えられる。たとえば次のようなものが挙げられる。

(3) がいしゅつ, 漏れ, ggr, う p 主, わこつなど

(3)では2ちゃんねる<sup>1</sup>とニコニコ動画<sup>2</sup>で使用されている言葉を挙げている。しかしこれらの言葉はそれぞれのサイト特有のものではなく、ネット上で幅広く使用されている。これらの表現は専門用語ではなく、ネット上で使用される俗語である。

では、ネットことばは「ネット用語」でも「ネットスラング」でもないとするれば、何を

指すものなのか。本稿では、ネット用語とネットスラングの中間的なものであり、たとえばネット用語から生まれたスラングやスラングの中でも特に幅広く使用されているものをネットことばと呼ぶこととする。たとえば、「つぶやき」という SNS 用語から生まれた「つぶやく」という動作（短文の書き込みを投稿すること）や「アップロード」の短縮形である「う p」（アップ）などである。

さらに、ネットことばには単語レベルのものや文レベルのものがある。従来の研究では単語としてのネットことばしか取り上げられることがなかったが、本研究では文レベルのネットことばにも注目していきたい。以下はネットことばの例である。

(4) 単語レベルのネットことば：つぶやく、ｲｲｯする、ﾘﾑる、う p 主など

(5) 文レベルのネットことば：日本語でお k、〇〇終了のお知らせなど

また、ネットことばを以下のように定義したい。

(6) ネットことばとは、インターネット関連の用語から派生した俗語やネットスラングの中でもネットユーザーの間で広く使用され、単語や定型文として定着している表現のことである。造語法にはキーボードの入力ミスや変換ミス、文字の置き換え、省略、借用、新語造語、有名な台詞の引用などがある。

そして、ネットことばをネット上の若者ことば(井上 2006)やネット上の集団語(松田 2006)としてとらえることもでき、日本語のバリエーションに位置付けることができる。

### 3. ネットことばに関する先行研究

これまでのネットことばに関する研究は、ネットことばを若者ことばの延長線上にあるものとしてとらえ、主に 2 ちゃんねるで使用されるものとしてとらえてきた。また、言葉よりもネット上における行動と心理や、2 ちゃんねるのコミュニケーションの特徴などが中心となっている。

ジョインソン(2004)はインターネットにおける行動と心理を研究し、ネットことばには仲間であることを確認する機能や部外者を判別できる機能などがあり、ネットことばはネット社会にとって必要不可欠のコミュニケーション手段であると述べている。

松田(2006)はネット社会における集団語を取り上げ、ネットことばを品詞別に分類するとともに、ネットことばが生まれるためには一般的な集団語のような「仲良しグループ」であること以上に、「気兼ねなくなんでも書き込める」気楽さが必要であると述べている。また、その気楽さを与えるのは「匿名で書き込む」ことであると述べている。

内山(2010)は 2 ちゃんねるやニコニコ動画で使用されるネットことばを研究し、それらのウェブサイトで生まれる言葉を造語法により分類している。米川(1998)の若者ことばの

造語法よりも多くの造語法が認められ、ネットことばには文字によるコミュニケーションの特徴が表れていることがわかる。また、内山(2010)はネットことばが生まれる背景には他人と自分の書き込みを何らかの形で区別したいという「差別化」や、効率よく早く書き込む必要性による「省力化」、そして新しい言葉や打ち間違い、変換ミスなどを楽しむという「新規思考」があると述べている。

また、ネットことばは若者ことばと同じように仲間内で娯楽や会話促進などのために使用される隠語のような言葉であり、特に匿名性や視覚情報の重要性が注目されている(米川 1996、亀井 2003、松田 2006、早川・井出 2007、内山 2010、岡田 2010、松村他 2010)。

以上の先行研究は主にネットことばの表記や役割に注目しており、教育を前提としていない。そのため、日本語教育にネットことばを取り入れる必要性について論じていない。本稿ではこの点に注目しながら、日本語教育においてネットことばをどう扱うべきなのか、ネットことばを日本語教育に取り入れる必要性と可能性について考察していく。

#### 4. 本稿の目的

本稿では、これまでの研究に見られなかった日本語教育の観点を加え、日本語学習者のニーズを調査し、分析することにより、ネットことばを日本語教育に取り入れる必要性について考察を行う。また、ネットことばを日本語教育のテーマとした際に、どのように扱うべきなのか、ネットことばの教材化の可能性について論じる。今後の日本語教育に必要なネットことばへの取り組みのヒントを見出すことにより、日本語教育に貢献できると考えられる。以下に調査の方法と結果を述べる。

#### 5. 調査の方法と結果

本稿では日本語学習者のニーズを分析するために、アンケート調査を行った。対象者は日本国内の日本語学校に通う日本語学習者 156 名と海外の日本語学校に通う日本語学習者 131 名の合計 287 名で、年齢は 18 歳から 30 代の男女である。海外の学習者については、インターネットを介してアンケートに答えてもらった。

調査した項目は、学習者のインターネット利用状況、SNS における日本語母語話者とのつながり、ネットことばとの遭遇経験、わからないネットことばと遭遇した場合の対処法、ネットことばに対する興味などである。次に調査結果を述べる。

##### 5-1 学習者のインターネット利用状況

日本語学習者が普段のネット上の活動でどのようなウェブサイトを利用しているのかを調査し、学習者の興味やネット上のコミュニティに対する積極性を調べた。ここでいう

インターネット利用状況とは、メールの読み書きやニュースを読む、動画を見るなどの一般的な利用ではなく、ネットことばが使用される環境に限定したネット上の活動であるため、あらかじめいくつかのウェブサイトを表示し、さらに学習者が自由に記述できる項目も設定した。

表1 日本語学習者のインターネット利用状況

ウェブサイト名	学習者数(人)	利用率
Facebook	255	88.9%
Twitter	195	67.9%
Mixi	11	3.8%
ニコニコ動画	154	53.7%
2ちゃんねる	39	13.6%
チャットツール	61	21.3%
ブログ	49	17.1%
その他の SNS	68	23.7%

表1は日本語学習者のインターネット利用状況を示したものである。最も利用者数が多かったのは Facebook で、全体の 88.9%を占めている。次に Twitter が 67.9%となっており、3位はニコニコ動画で 53.7%の学習者が利用していると答えた。この結果から、ネットことばが使用されるウェブサイトが学習者が積極的に利用しているといえる。

## 5-2 SNS における学習者と日本語母語話者とのつながり

SNS において学習者が日本語母語話者とのつながりを持っているかどうかを調査し、上記のウェブサイトにおける活動の積極性を調べた。

表2 SNS における日本語母語話者とのつながり

ウェブサイト名	利用者数(人)	日本語母語話者とのつながりを持っている学習者数(人)	つながりを持っている学習者の割合
Facebook	255	214	83.6%
Twitter	195	163	83.9%
Mixi	11	11	100%
その他の SNS	68	63	92.6%

表2は SNS における学習者と日本語母語話者とのつながりを示したものである。Facebook を利用している学習者の 83.6%、そして Twitter を利用している学習者の 83.9% がそれらのウェブサイト日本語母語話者とのつながりがあると答えた。その他の SNS では LINE や Instagram、pixiv などが挙げられ、すべて合わせて 92.6%である。SNS においてはメッセージを送るなどのやり取りも考えられるが、つながっている人の書き込みが自分のホームに表示されるため、常にそれを見ることができる。そのため、直接的なやり取りがなくても、間接的なやり取りが行われていると言える。

### 5-3 日本語母語話者の書き込みとネットことば

次に、日本語母語話者とのやり取りの中にわからないネットことばがあるかどうかを調査した。79.1%の学習者がわからない表現が書き込みにあると答えている。学習者の多くが、わからないネットことばに遭遇しているということを示唆している。

表3 日本語母語話者の書き込みにわからないネットことばがあるかどうか

回答	学習者数(人)	回答の割合
わからない表現がある	227	79.1%
わからない表現がない	37	12.9%
無回答	23	8.0%
合計	287	

### 5-4 わからないネットことばへの対処法

次に、わからないネットことばと遭遇した場合、学習者はどのような対処法をとっているのかを調査した。表4で学習者の回答を示す。

表4 わからないネットことばへの対処法

対処法	学習者数(人)	回答の割合
インターネットで検索	211	93.0%
日本人の友人に聞く	152	67.0%
日本語の先生に聞く	141	62.1%
辞書を引く	62	27.3%
何もしない	7	3.1%

わからないネットことばと遭遇した場合、93%の学習者はインターネットを用いて調べると答えている。これは、インターネットを利用時にネットことばと遭遇することを考えれば、最も効率の良い方法であろう。次に「友人に聞く」を選択している学習者が67%いた。友人とのやり取りの中でわからないネットことばが出現すれば、その人に直接その意味を聞くことが効率の良い方法である。

次に多かったのは、「日本語の先生に聞く」という回答で、学習者の62.1%がこれを選択している。即座に調べる学習者もいれば、それを記憶したり、メモしたりして次に担当の日本語教師に会った際にその教師に質問する学習者もいるということである。また、辞書を引く学習者もいたが、ネットことばが辞書に記載されていないことを考えれば、解決につながる選択肢ではない。

### 5-5 ネットことばに対する興味

最後に、学習者のネットことばに対する興味を調査した。表5はその結果を示す。

表5 ネットことばに対する興味

回答	学習者数(人)	回答の割合
使えるようになりたい	106	36.9%
理解できるようになりたい	112	39.0%
使いたくはないが理解できるようになりたい	31	10.8%
興味がない	24	8.4%
無回答	14	4.9%
合計	287	

36.9%の学習者が「使えるようになりたい」と答えている。これはネットことばもネット上のコミュニケーションにおいて必要であり、学習者が普段から利用しているウェブサイトでも使用されることに由来していると推測できる。次に39%の学習者が選んだのは「理解できるようになりたい」である。そして「使いたくはないが理解できるようにはなりたい」と答えた学習者は10.8%いた。これらの結果を合わせると、86.7%の学習者が「興味がある」と答えていることになる。

#### 5-6 調査結果のまとめ

今回の調査結果から次のことがいえる。まず、日本語学習者の多くがネットことばの使用率が高いウェブサイトを利用し、ネット上のコミュニティに参加することがある。特にFacebookやTwitterのようなSNSの利用が目立つ。また、それらのウェブサイトで学習者は日本語母語話者と交流し、ネット上の人間関係を築くことがある。SNSにおいて学習者はメールの送受信のような直接的なやり取りだけでなく、日本語母語話者の書き込みを読むという間接的なやり取りもしていると考えられる。そして、学習者はその母語話者とのネット上のやり取りや書き込みを読んでいる際、わからないネットことばと遭遇し、通常の会話とは異なる理解の困難が生じる場合がある。

それらのわからないネットことばと遭遇した場合、学習者は自身でその表現の意味を調べたり、日本語母語話者の友人に聞いたりすることもあれば、日本語教師に助けを求める場合もある。多くの場合、普段から参加しているネット上のコミュニケーションでネットことばが使用されるため、学習者はネットことばに興味を持ち、理解できるようになりたい、あるいは使用できるようになりたいと考えている。学習者はネットことばに対して積極的であるといえよう。

## 6. ネットことばと日本語教育

英語教育では、ネット上のスラングがディスカッションのテーマとして取り上げられ、ネット上のコミュニティやツールを用いて学習が行われることがある。ネット上の言葉の



習得を最終目的としているわけではないが、知識として提示することもあり、学習者の使用語彙に見られるネット特有の表現が観察の対象となる場合もある。実際に会って話すより、チャットやメールを通じて話すほうが気楽でスムーズであるという結果があり、語彙の増加も確認され、学習者が積極的に取り組んでいる様子が見える(Ozdener 2008:166-167)。

また、三國他(2011:160)によると、日本語学習者は学習年数が長くなるにつれてインターネットを通じた活動の種類が増加し、学習だけでなく、情報収集やコミュニケーションのためにインターネットを利用するようになる。このような学習者がインターネットを通じた活動に対して積極的であるなら、日本語教育でもインターネットを通じた活動に効果が期待できると考えられる。

日本語学習者がネットことばに興味を持ち、ネット上のコミュニケーションでそれらを必要としている。そして、日本語教師の手助けを必要としている。そこで、一つの答えとして、ネットことばやネット上のコミュニケーションをテーマとした日本語教材を提案したい。ただし、これまでの日本語教育を否定し新たな日本語教育を提案するのではなく、また日本語学校のカリキュラムを変えるというのではなく、課外活動や学習者の興味のあるテーマなどの選択肢を増やすためのものである。

ネットことばを取り入れた教材には次のような利点が考えられる。まず、これまでの日本語教育で取り上げられてこなかった日本語のバリエーションを話題にして日本語のバリエーションを知ることができる。さらに、その他のバリエーションに比べれば、学習者にとって非常に遭遇しやすいバリエーションである。例えば、若者ことばを耳にするには日本人の若者との交流が必要である。また、地域方言であれば、特定の地域にいない限りその言葉を知ることができない。それに対し、ネットことばは文字として残り、世界中のどこにいてもいつでも閲覧することができる。

また、ネットことばの教材を通じて学習者のネット上における人間関係構築の手助けもできると考えられる。教材を通して学習者だけでなく、日本語教師も知識を身につけることができ、学習者に相談された場合、指導することができる。そうすることにより、多様化し続ける学習者のニーズに応えることができると考えられる。

しかし、「きれいなことば」ではないことも考慮する必要がある。米川(1998:3)は実際のコミュニケーションには「良いことば」だけでなく、時には「悪いことば」も必要であると述べているが、「良いことば」よりも「悪いことば」のほうが扱いに注意が必要である。それは、「悪いことば」には、下品な言葉や人を傷つける言葉も含まれているからである。日本語教育から排除すべき表現もあり、用法に注意が必要な表現もある。意味を理解して



も、ふさわしくない場面で使用してしまうと、人を傷つけたり、相手を怒らせたり、人間関係に悪影響を及ぼす可能性のある言葉もある。そのため、指導する際には、注意事項も十分に指導する必要がある。また、若い世代を中心に広がる日本語のバリエーションであり、すべての日本語母語話者がそれを受け入れ、理解できるとは限らないことにも注意する必要がある。

さらに、学習者のレベルも十分に注意する必要がある。初級の学習者にはふさわしくない内容であろう。そして、積極的に日本語によるネット上のコミュニケーションに参加するには日本語の理解が必要であるため、中級以上のレベルが好ましい。また、インターネットを利用しない学習者に強要すべきではない。

では、実際に日本語教育にネットことばを取り入れる場合、どのように扱えばいいかについて考えたい。ここでは小矢野(2007)を参考にしたい<sup>3)</sup>。小矢野は、指導する際に「悪い言葉だ」や「間違った日本語だ」という価値観を持たないことが大切であり、教材化する場合は現実のコミュニケーションに基づいたものが望ましいと述べている(小矢野2007:39-40)。また、単語や文体、助詞、動詞の活用などの指摘では不十分であり、実際の会話例を使用したり、漫画や携帯メールを使用したり、必ず話し手と聞き手(発信者と受信者)がいることを意識し、コミュニケーションに注目する必要がある。

ネットことばもネット上のコミュニケーションでは必要なものであり、教育者の価値観を指導に加えてはならない。また、実際に指導する際には、単語帳ではなく、ネット上の実際の例を収集し、コミュニケーションの中で使用を観察しながら指導することが好ましい。小矢野(2007:43-44)が述べるように、漫画や携帯メール、さらに実際のネット上のやり取りが教材として有効であろう。

さらに、ネットことばは規範にとらわれない自由な言葉であるため、次々と新しい表現が生まれ、激しく変化するものである。そのため、テキスト化は難しいが、パソコンや携帯端末を用いて使用する教材であれば、編集も容易であり、学習者に最新の情報を提供することもできると考えられる。そして、同じようにパソコンや携帯端末を用いてネットことばを実際に使用することもできる。

たとえば、最近では数えきれないほどの通話アプリがリリースされており、それらには「グループチャット」という複数人数でメッセージのやり取りに参加できる機能が多い。また、SNSにおける投稿やブログなどをイメージした活動もできる。それらを利用すれば、クラスのグループを作成し、授業以外の時間にも学習者に日本語を使う機会を与えるとともに、ネットことばの習得または理解にも役立つと考えられる。

一つの案に過ぎないが、今後の日本語教育にはこのような教材が必要であろう。

## 7. まとめ

本稿では、日本語学習者のネットことばに対する興味や遭遇経験などを調査し、学習者のニーズに基づいてネットことばの重要性を分析した。学習者はネット上のコミュニケーションに普段から参加しており、ネットことばに対しても積極的な態度を見せている。また、学習者自身でネットことばを身につけようとする場合もあれば、日本語教師にも頼る場合もあることが明らかになった。

調査結果をもとに、ネットことばを日本語の教材に取り入れる可能性について考察を行った。ネットことばの実際の扱い方について、小矢野(2007)に基づき、単語帳や文体の指摘だけでは不十分であり、実際のコミュニケーションに基づく指導が必要であると述べた。また、若者ことばや方言などに比べ、文字を媒体としているネットことばのほうが扱いやすいという利点がある。

ネットことば教材の実現に向けて今後の課題としては、ネット上のコミュニティにおける行動や言葉の更なる研究、日本語以外の言語との比較、教材に取り入れる必要があるネットことばの分類などが挙げられる。

## 謝辞

調査の実施にあたり、ご協力いただいた大阪日本語教育センター、京都外国語専門学校、西部日本語学校、またご協力くださった学習者の皆様、心より感謝申し上げます。

## 注

- (1) 「2ちゃんねる」とは、スレッドフロート型掲示板で複数の電子掲示板の集合体である。日本最大の電子掲示板サイトである。
- (2) 「ニコニコ動画」とは、株式会社ニワンゴが提供している動画共有サイトである。
- (3) 小矢野の指摘は若者ことばについてであるが、ネットことばにも適用できると考えられる。

## 参考文献

- アダム・N・ジョインソン (2004)『インターネットにおける行動と心理—バーチャルと現実のはざままで—』三浦麻子・畦地真太郎・田中敦(訳), 北大路書房.
- 井上逸兵 (2006)「ネット社会の若者ことば」『言語』35巻3号, pp.60-67, 大修館書店.
- 内山 (2010)「ネットの日本語—2ちゃんねるとニコニコ動画を中心に—」『地域政策科学研究』第7号, pp.219-236, 鹿児島大学.

- 岡田祥平 (2010)「インターネットで使われる言葉—2ちゃんねるにみられる顔文字について」『比較民俗研究』第 24 号, pp.198-206, 筑波大学比較民俗研究会.
- 亀井肇 (2003)『若者言葉事典』日本放送出版協会.
- 小矢野哲夫 (2007)「若者ことばと日本語教育」『日本語教育』134 号, pp.37-47, 日本語教育学会.
- 早川公・井出里咲子 (2009)「2ちゃんねるのことばとコミュニティ感覚—カキコミの作法が作る一体感をめぐって—」『メディアとことば』4 号, pp.192-219, ひつじ書房.
- 松田健次郎 (2006)「ネット社会と集団語」『日本語学』25 卷 10 号, pp.25-35, 明治書店.
- 松村真宏、三浦麻子、柴内康文、大澤幸生、石塚満 (2004)「2ちゃんねるが盛り上がるダイナミズム」『情報処理学会論文誌』45 卷 3 号, pp.1053-1161, 一般社団法人情報処理学会.
- 三國喜保子、谷口美穂、岩下智彦、川崎タルつぶら、張世襲、岩本尚希 (2011)「日本語学習者の教室外におけるメディア使用の実態—6 カ国におけるアンケート調査から—」『桜美林言語教育論議』7 卷, pp.147-162, 桜美林大学.
- 米川明彦 (1996)『現代若者ことば考』丸善ライブラリー.
- 米川明彦 (1998)『若者語を科学する』明治書店.
- Ozdener, N. (2008) Computer-Mediated Communication in Foreign Language Education: Use of Target Language and Learner Perceptions. *Turkish Online Journal of Distance Education*. Volume 9, Number 2, pp.165-181.

添付資料 1 (アンケート用紙)

国籍：                      年齢：                      性別： 男・女

日本語学習歴：

① 以下のウェブページを利用していますか。該当するものに○を付けてください。

Twitter	ニコニコ動画
Mixi	2ちゃんねる
Facebook	ブログ (                      )
チャットツール (オンラインゲーム含む)	その他の SNS (                      )

② SNS で日本人とのつながりはありますか。(例：Twitter のフォロワーなど)

Twitter	ある	ない
Mixi	ある	ない
Facebook	ある	ない
その他の SNS	ある	ない (                      )

③ 上記のウェブページを利用している際、日本人の書き込みで辞書に載っていないかわからない表現(インターネットだけの言葉)はありますか。(例：「wktk」、「うぼつ」など)

ある                      ない

④ わからない表現があると答えた方、覚えている例があれば書いてください (例：「www」、「乙」など)。

⑤ ④の「わからない表現」のようなことばや言い回しに興味はありますか。

- |                          |                 |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 使えるようになりたい            | 3. 理解できるようになりたい |
| 2. 使いたくはないが、理解できるようになりたい | 4. 興味がない        |

⑥ ④のような「わからない表現」があったときはどうしますか。

- |                 |              |          |
|-----------------|--------------|----------|
| 1. 日本語の先生に聞く    | 3. 日本人の友達に聞く | 6. 何もしない |
| 2. インターネットで検索する | 4. 辞書を引く     |          |